

未来につなぐふるさと安曇野講座 現地学習「水の郷の歴史を訪ねて」(H26. 10. 16)

☆ 松声山 龍門寺

龍門寺は曹洞宗の寺で、寺伝には「行基が行脚の折信州を通過し、龍門淵が莊嚴で景色がすばらしかったので、滞在され、岩の上に端座して 21 日間参籠し諸民の無事平和を祈願された。満願の日に淵の中から白蛇が現れ、行基から仏教の戒を授かったお礼に 1 寸 8 分の黄金仏を献上した。それが龍門寺の宝物となり、行基が聖武天皇から賜った宝剣が龍神宮の御神体となっている。行基が一刀三礼して刻んだ聖観音像が行基の建立した五重塔の本尊である。また、その後廃絶の時期があり、室町時代永正 2 年(1504)に再興されたこと」などが記されています。現在の本尊聖観音像は、室町初期の製作と考えられており、元禄 11 年の書き上げ帳にもこの像が三重の塔の本尊であると記されています。

寺は、室町時代の永正 2 年に大町大澤寺の乾叟全亨和尚が復興し、中興開山として記録に残る初代となっています。さらに江戸時代初めに穂高町青原寺第九世松岩正祝和尚によって再興され、明治初期まで同寺末となっています。

本尊聖観世音菩薩坐像は、像高 94.5 cm、寄木造、髻が高く法冠を頂き、目は玉眼、身に衲衣を着け、右臂は曲げて施無畏印を結び、左臂も曲げて蓮華を持ち、右足を外側にした結跏趺坐の坐像です。後の彩色漆箔によって原容が損なわれてはいますが、締った面相や全体にまとまりのある作りは、鎌倉末～室町初期の仏像として地方の仏師ではなく中央の仏師の作の可能性あります。

☆ 龍門淵

大正から昭和の初めまでに現在の堤防が築かれる前は、段丘のすぐ近くまで犀川の本流が押し寄せていて、ここは地盤の岩が突き出し大きな淵となり犀川の難所で、江戸時代にここを通る舟の船頭は龍門淵の社に必ず安全を祈り通行したといいます。

龍門淵の上の台地上は祭祀遺跡となっており、弥生時代後期から古墳時代にかけての祭祀遺物が採集されています。古代から物資の輸送に重要な役目を持つ犀川の一番の難所であるこの地で、連綿と川を鎮める祭りが行われていたようで、いわば日本のローレライとでも言うべき場所です。

昔から龍神伝説や貸椀伝説が伝えられており、松本藩領であった水野家の時代には、殿様の崇敬も篤く、殿様の村巡回の折には必ず参拝したといいます。また雨乞いのマツリもしばしば行われたようで、川手筋の村々が共同で雨乞いを行ったことが大庄屋の日記などにその記録が見えます。

○龍門淵の地蔵

昔から龍門淵に地蔵様が祭られてあった。松本藩主石川玄藩守の時代に、石の宮殿は松本城に召し上げられたが、その後水野隼人の時に返された。この地蔵様を近くの子供たちが縄で縛って転がしたり、引っぱって歩いたりした。けれども地蔵様は少しも怒った様子も見せず、かえって笑っているようにさえ見えた。ある日、子供たちのいたずらが余りにもひどいので、見るに見かねた老人が子供を叱って泥で汚れた地蔵様をきれいに洗って、もとの場所に安置した。その日から子供は誰一人遊ばなくなった。ところがこの老人は、急に重い病気になってしまった。夢枕に立った地蔵様は「わしが子供たちと楽しく遊んでいるのになぜ邪魔をした。一日も早く前のように遊びたわむりたい」とひどく怒った。この老人は一生懸命におわびをして、子供たちを遊ばせたところ、病気は治った。皆は不思議な仏徳を尊び、子守護地蔵と称し、地蔵堂を建て安置したという。その後この地蔵堂は本町から龍門寺境内へ移された。(龍門寺地蔵堂縁起)

☆ 明科廃寺

昭和 28 年 1 月尾崎氏宅の住宅新築のための整地中に地表下 30 cm ほどから布目瓦片が出土したことから、一志茂樹、原嘉藤両先生がボーリング調査などの現地調査(第 1 次調査)をされ古代寺院址として遺跡発見届が出されました。同年 10 月地続きの田(現在の天理教教会付近)が客土のため掘

削され、やはり地表下30cmほどから多量の布目瓦と10cmほどの礫を用いた礫敷遺構が見つかり、この掘削溝をトレンチとして簡単な調査と測量が行われた（第2次調査）が、本格的な調査は手続等の行き違いから行われませんでした。

この時に発見された軒丸瓦は、当時の東京国立博物館学芸部長石田茂作博士により「素弁8葉蓮華文の白鳳様式、単弁12葉蓮華文の奈良様式、内縁部に弧を持つ平安様式」の3形式に分けられており、遺構の中心は、天理教教会南の弁天祠のある小丘とし、これを中心に小字石堂の方1町程度を寺院址と推定されています。

平成11年、廃寺発見の端緒となった尾崎氏宅が建て替えられることになり、初の本格的な発掘調査が行われました。

調査では、掘建て建物が2棟、布掘りの基礎を持つ掘立建物1棟、建物の基礎1棟が検出されました。この内掘建て建物はほぼ同じ場所に建替えられた新旧2棟の建物址で、旧は四角な柱穴、新は丸い柱穴で、旧の建物の址に新しく同じような建物を建替えています。

建物から崩れ落ちたように列になって落ちたように出土している瓦の出土状況、これと平行する丸い穴の掘建て柱の列から5間ないし4間×2間ないし3間の総柱の掘建て瓦葺の建物址が想定されます。一般的には丸い柱穴の掘建て建物址は平安時代から出現しますが、使用された瓦はいずれも古い瓦であり、丸い柱穴の掘建て建物址の古い例とも考えられます。いずれにしても大きさ、瓦を使っていることなどから蔵の可能性が高いと思われます。

また、四角の柱穴を使った建物址は、5間以上×2間あるいは3間の建物址が推定できます。遺構の切合い関係から丸い柱穴の掘建て建物址に先行する建物址であり、用途としては、古い時期の蔵か、瓦塔片が付近に見られることから、瓦塔を納めるための建物であった可能性もあります。

また、布掘り基礎の建物址は、大きさから倉庫や蔵ではないかと思われます。7世紀以後の東日本に多く見られる様式で、渡来人との関係が考えられます。

調査では、建物の屋根に使われた瓦(平瓦、丸瓦)が多数（このうち軒丸瓦10点、軒平瓦1点）と瓦塔片8片などが見つかっています。これらは、犀川の対岸、七貴塩川原から荻原地区の山麓にある桜坂・宮原古窯址で焼かれたものです。

発掘調査の結果、調査地区は廃寺の東端に近い部分と想定され、回廊に囲まれた、金堂や塔がある中心伽藍ではないと考えられますが、寺域の一角であることは確実に、蔵や倉庫などがある「経営地域」と想定しています。

古代寺院の数は圧倒的に畿内が多いが、東北地方から九州までほぼ全国で見つかっています。特徴は7世紀中ごろから末にかけて一斉に創建され、完成までに数十年を要し、9～10世紀には廃絶する例が多いといわれています。規模は方1町(100m)から1、5町(約150～165m)四方の寺域を持ち、七堂伽藍(金堂・塔・講堂・中門・南門など)を巡らす本格的な寺院で、見せることを意識したモニュメント的な要素が強く、政治的な権力を誇示する意味があるのではないかとされています。いわば、それまでの古墳に代わるモニュメントとして作られた要素が強いといわれています。また、氏族寺院であり、郷名氏族が創建する例が多く、首長の居宅が隣接するといわれています。

寺院の建立には測量、建築、造瓦など多種多様な知識と技術が必要で、中央からの技術者派遣で古代の寺院は造られ、しかも経済的な支援も受けています。とすると、明科廃寺を造った有力な氏族は、中央とかなり密接な関係があったと思われます。明科廃寺を建立した有力氏族は、交通の要所である明科の地にあって、流通や交易に関係しかなりの財力と権力を持っていたと想定されます。

平安時代10世紀前半に編纂された『和名類聚抄』には、高家・八原・前科・村上の四郷があったことが記されており、各郷を現在のどこに比定するかさまざまな論考が為されていますが、八原郷は現在の穂高矢原地籍を中心とした穂高から松川村にかかる一帯を、村上郷は大町市の全域を、前科郷は池田町から明科七貴にかけての大峰丘陵の山麓地域を当てることで多少の相違はあるもののほぼ定まっていますが、高家郷については、豊科南部の高家地区から三郷・梓川一帯を想定する論考が有力でしたが、高家の地名は新しい地名であり、7・8世紀の遺跡がないなどから現在の高家を当てることに

は疑問があります。

岐阜県飛騨市古川町所在の寿楽寺廃寺(太江遺跡)では、明科廃寺出土の素弁八葉蓮華文と同じ氈型を使った特長ある軒丸瓦が出土しており、寺院址の遺構とともに「高家寺」と墨書のある土器が出土したことから、寿楽寺廃寺の所在地である太江は高家から転訛した地名であり、安曇郡の高家と同一の地名となります。同じ型を使った瓦を持つ寺院と地名から、安曇郡の高家郷を明科の川手筋を中心とした地域に想定することはかなり有力な考えと言えます。

また、寿楽寺廃寺と同じく飛騨市古川町所在の杉崎廃寺跡では、平成3年から7年の調査で、寺院のほぼ全域が調査され、東西37.5m、南北36mの小規模な中心伽藍の内部全面に人頭大の玉石が敷き詰められており、明科廃寺の1次調査でも中心伽藍と思われる場所で礫敷きが検出されており、関連が注目されます。今後飛騨古川地域と安曇野の関係についての検討が必要です。

いずれにしても寺院の建立には建築技術、瓦の製造などに中央からの技術的な援助が必要であり、財政負担、労働力の確保も大変であることから、かなりの権力者が想定されます。古代の郡衙遺跡では寺院址が近接する例が多く見られることから、この明科の地が古代安曇郡の経済的、政治的な中心地であったことが想定されます。3つの遺跡のほか付近の上手屋敷遺跡では大型の掘立建物址や集落址、遺物として円面硯などが、北村遺跡の調査では倉庫群と見られる掘立建物址などが見つかっています。

☆ 国鉄篠ノ井線開通と明科国営製材所

国鉄篠ノ井線は明治27年中央線塩尻と信越線篠ノ井を結ぶ鉄道として国会の議決を経て、明治29年10月に工事が着工されましたが、日清戦争の影響で工事が中断されたこともありましたが、明治33年11月篠ノ井西条間が開通しました。西条明科間はトンネルが大小5箇所、岩を削り谷を埋める難工事で、多くの犠牲者が出たことが、龍門寺境内に明治35年に当時の住職の力で建てられた慰霊碑に記されています。

松本西条間は明治35年6月15日に開通、松本塩尻間はわずかに遅れ、同年12月15日に開通しています。明科駅の開業により、それまで戸数70戸ほどの寒村であった明科は、商売のため多村から移住する人が増え、物資の集散地として運送業者や旅館、飲食店などが増えにぎわうようになりました。

明科駅の開業と明科の地が松本平の水がすべて集まる地の利から、明治41年10月、現在の市役所明科支所周辺一帯に農商務省長野大林区署明科製材所として、政府の手により起工され、明治42年5月国営製材所が操業を開始します。工場は、敷地は2.5ヘクタール余、原動力は150馬力の蒸気機関2台、職工80余名、工場外の作業員200名余の大きな規模の工場でした。波田、小倉などの国有林から木材を筏に組み犀川を下り、現水産試験場の南東にあった貯木場で荷揚げし、そこから手押しのトロッコで工場まで運んだといわれており、このトロッコの通った道は岩淵畳店から加々美豆腐店までの直線はトロッコ道と呼ばれています。

明科はアルプス一帯の国有林で伐採された材木を、烏川・高瀬川・梓川・犀川の水を利用して、筏に組んで運ぶことや、また製品を各地へ売り捌くのに明科駅が明治35年に開設されて都合がよかったこと、地元の倉科多策や望月浜四郎、織太郎村長等の誘致運動もあって、この地に官営の製材所がつくられました。

この国営製材所の機械の据付の技術者として明治42年6月赴任したのが、大逆事件の主人公宮下太吉です。宮下は、1年足らずの翌年5月25日逮捕されます。

国営製材所は、創業からわずか4年の大正2年5月24日、機関室から出火しすべての建物を焼く大火災となり、大量の木材は丸2日以上燃え続けたといえます。火災は宮下太吉の逮捕された5月25日と1日違いであることから、大逆事件により刑死した宮下のたたりと言う噂が飛んだといえます。

☆大逆事件

明治天皇の暗殺を計画したという理由で、多数の社会主義者・無政府主義者が検挙処刑された事件で、幸徳事件ともいわれています。

日露戦争反対を機に高揚した社会主義運動に対し、時の政府であった第二次桂内閣は種々の抑圧を加えて合法的な活動を封じ機会があれば主義者たちの一掃をねらっていました。

社会運動家 木下尚江の影響を受け荒畑寒村、幸徳秋水と深い関係のあった社会主義者の菅野須賀子は宮下太吉、新村忠雄、古川力作と弾圧に対する抗議と、皇室に対する迷信打破を目途に爆裂弾による天皇暗殺計画を話し合ったとされています。

明治四十二年に開業した国営明科製材所の機械据付工として宮下太吉（甲府出身）が赴任します。宮下はその立場を利用して爆裂弾を製造、会田川べりの崖で（「なつな沢」崖やもっと明科よりの「継子落し」説もあり、場所は特定されていないし、実況見分もされていない。また実験の日も11月3日天長節の松本の花火に合わせたという説と11月20日の明科の恵比寿講の花火に合わせたなどの言い伝えもありはっきりしない）で実験をします。爆裂弾の実験に成功した太吉は理論的指導者である幸徳秋水に実行をせまりますが、彼は著述に専念することを理由に応じなかったと言われています。

宮下は前任地の愛知県亀崎鉄工所にいるところから社会主義の活動を行っていたため、警察からマークされており、明科に来てからは明科駐在巡查、小野寺藤彦が徹底的に監視していました。宮下の同僚などからの情報で爆裂弾製造を察知した警察は、明治43年5月25日、宮下太吉を逮捕、同士である新村忠雄、菅野スガ、古川力作も同時に逮捕します。当初はこの四人だけの事件でしたが、6月幸徳秋水を逮捕し、これを契機に社会主義運動の撲滅をねらって全国の主義者数百名を検挙しました。この事件により、「明科」の名は一躍全国に知れわたることになりました。

主な検挙者は皆大逆罪に問われたため、大審院（現在の最高裁に当たる）で非公開裁判となり、ひとりの証人調べもなく、12月10日に始まった裁判は翌1月18日に判決という異例なもので、起訴された26名は全員有罪で、秋水を含め24名が死刑と決まりましたが、翌日なぜか12名は刑一等を減じられて無期懲役となります。判決から1週間を待たず1月24日に幸徳ら11名が、翌25日に菅野須賀子の処刑が行われました。

この裁判に対しては、国内の文学者鴎外、蘆花、啄木、荷風らが作品講演などを通して、またイギリス、フランス、アメリカ、オランダなど諸外国から抗議が殺到しました。日本はこの事件を契機に言論の自由が狭められ、ファッショ化への道を急速に歩むことになります。

明科に端を発し、やがては日本の運命を左右する事件にまで発展した大逆事件、事件から百年が経過し、事件の舞台となった建物や風景も姿を大きく変わり、ともすれば忘れ去られようとしています。明科の人々にとっては、事件は明科に全く縁のない通りすがりの宮下太吉が起した大変迷惑な事件であった。明科近在の宮下姓の家では縁談に差し障りがあったともいわれるほどでした。そのためこの事件は、永く住民の口から語られることはありませんでした。

しかし、この事件は、核心の爆裂弾事件に関する実況見分も行われず、実験の場所、日時さえ特定されていない、真相が明らかでない事件で、宮下ら四人を除けば、全くの冤罪事件であるというのが歴史学上の定説となっています。

事件の調査が行われたのは戦後になってからです。堺利彦や大杉栄などと親交のあった中川手中耕地在住の望月桂氏が最初で、氏の調査の成果は神崎清著『革命伝説』の基礎となっています。また、東筑摩郡誌編纂委員会の調査や、『明科町史』の編纂での、全戸へのアンケート調査と古老への聞き取り調査などにより、新たな証言が得られるなどの成果があり、小野寺巡查の遺族から貴重な資料の提供もあり、資料館の大逆事件コーナーの開設につながりました。（資料館閉鎖に伴い現在休止中）

事件発覚の地である明科で、この地でいったい何が起きたのかを明らかにし、この事件を風化させないためにありのままの歴史をふりかえり、同じ悲劇を繰り返さないために後世に伝えていきたいものです。